

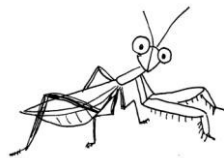
小網代をたずねて

中井由実

「東京湾の調査をしてもらえませんか？」

あまりにも唐突な申し出だった。私の母校の、環境法を専門とする教授の言葉であった。私はといえば、大学の理学部を出て化学会社の研究所に勤める会社員。ただ、小学生の頃から公害問題に強い関心を持っていた。一応研究職に就職したものの会社業務の中で、こんなことをしていいのだろうか、という想いが次第に強くなってきていた。そんな折り故郷の島根県で、宍道湖・中海環境保全シンポジウムが開かれるのを知った。私は迷うことなく松江市に飛び、環境問題の研究者たちの話に聞き入った。そして、懇親会の席上で、主催者の先生と話をする事ができた。その人は、私がわざわざ東京から来たと知ると、この日の講演者の一人だった先の教授を紹介してくれたのだった。冒頭の「東京湾の調査を」というのは、私が積極的な形で何か環境問題に関わりたいと思っていると、自己紹介したのを受けてのものだった。とはいえ、突然すぎることで戸惑いが先に立った。それまで私は、実験室で試験管を振るようなことしかしたことがなく、新聞を読むのも苦手で社会や法律には全く弱いときていた。化学や生物学的なことならともかく、法学部教授のいう「調査」がどんなものを指すのか、全然イメージがわからない。教授にそう言うのと、「あなたなら大丈夫ですよ。」もちろん社交辞令にすぎない。不安は解消されない。けれど同時に、これで環境問題に関わることができると思った。やらなくちゃ、という気持ちで背中を押した。

「ぜひ、お手伝いさせてください。」何の自信も無いまま、そう言葉が口をついていた。私は正直に言ったのだ、お手伝いをと。しかし、この時の私には思いもよらないことだったが、実際に教授が求めていたのはアシスタントではなく、ひとつの調査を任せることのできる研究者だったのだ。こんな誤解の元に、東京で詳しい打ち合わせをすることが約束された。ともかくも、私の「環境問題活動」はこうして始まることになった。一九九一年三月末のことである。



帰京して約十日後、私は教授の研究室に出向いた。彼は期待に満ちた笑顔で私を迎え、数冊の資料を手渡してくれた。神奈川県三浦市にある小網代地域の自然と開発計画についてのもので、これが私の調査のテーマというわけだ。しかし、その後の教授の話聞いて驚いた。調査とは研究で、研究であるからには報告書を書かねばならず、それはつまり論文である。これは、文部省の重点領域研究の予算で行うもので、都市部の湾岸域開発として望ましいあり方を調査する。他大学の研究者も加わっているが、教授のグループは主に東京湾域を対象とする。（三浦半島であれば、東京湾近郊として取り扱える）数箇所の地域を選んであり、各人一地区を担当し、研究期間の三年終了時にはすべての論文をまとめて本にする。既に二年目に入っていたので正味あと一年半し